

# バイオリン教育と合気道の観点からの内発的動機づけと取り入れ的

## 動機づけの一考察

1210452 佐藤智一

高知工科大学 経済・マネジメント学群

### 1. 概要

筆者は中学より合気道を始め、合気道の指導者を目指した。ここには内発的動機づけが生じたが、それは幼少期より筆者が経験したバイオリン教育による才能教育法が要因ではないかと考えた。バイオリン教育と合気道の動機づけのメカニズムを聞き取り調査、文献調査を基に明らかにする。

### 2. 背景

筆者は、3歳でバイオリンを習い始め5歳の頃より、北九州にある篠崎バイオリンスクールでバイオリンを習い、小学6年生の頃にその習い事を辞めるが、同時期の小学5、6年生の頃に、バイオリン以外に漫画の影響で武道に興味を持つようになり、合気道始めた。合気道は大学になっても続け、合気道本部道場の指導員として指導したいという意思を強く持つようになった。

バイオリンを習っていた幼少期、少年期は、母の教育により内発的動機づけよりも取り入れ的調整による外発的動機づけ（以下、本稿では「取り入れ的動機づけ」と称する）を感じていたが、合気道では内発的動機づけを感じた。

本部道場での挑戦を終えた今では、バイオリンへの内発的動機づけが高まっており、日々練習を続けている。

### 3. 目的

筆者は、幼児期・少年期に習ったバイオリンでは取り入れ的動機づけを感じていた。その後始めた合気道では内発的動機づけを感じ、合気道を終えた今では再びバイオリンに戻り、今度は内発的動機づけにより、バイオリンを修練している。本研究では、そこにはどのようなメカニズムが働いているかを明らかにすることを目的とする。さらに、仮に筆者が子供に同様に幼児のバイオリン教育をする場合、どのような指導法が適しているかを検討することを試みる。

### 4. 研究方法

鈴木鎮一氏に関する文献調査を行ったうえで、母親への聞き取り調査と筆者の合気道体験談を基に Ames の熟達目標を促すクラス構造分析、筆者の経験した取り入れ的動機づけと内発的動機づけ分析、合気道の動機づけ分析、さらに、幼少期の動機づけから合気道を経て現在の動機づけに至るまでの全体での分析を行う。

### 5. 文献調査

鈴木鎮一氏は、バイオリン教育において、自身の経験から独自の方法論を構築した。その才能教育法は「鈴木メソッド」と呼ばれ、高く評価されている。筆者が通った篠崎バイオリンスクールの理念に深い影響を与えた。以下にその本質の一例を示す。

- 「環境に適応して幼児は無意識のうちに、見聞きするすべてを身に付けて育ち、その人格を形成していく。」
- 「遊びで始め、遊ぶ楽しさで導く」
- 「大切なことは、子供の心の中に重苦しい気分を作ってしまうことを恐れなければならないということ。」
- 「あくびは集中する心の不足が原因である。子供はほとんどどんな子供でも始めは一つのことに長く心を集中させることができない。子供の心は休みなく次から次へと移り変わっていくもの。わがままな子ほどそれがひどくなる。」
- 「大切なポイントは、自分から良い姿勢で弾こうと思う心を、どのような言葉や方法で作らせるか、ということではないか。下手なやり方をする人々は、いつも自分のやらせようと思う行為を子供に直接的にさせようとする。つまり、一種の命令になる。」

- 「育て下手な親は、叱って育てる。叱って育てれば、叱られることを何も感じない能力が育ち、強情な心、親の言うことを聴かない子供に育つ。真の教育は親の反省から生まれる。」
- 「才能は生まれつきのものではない。才能はどの子にも育つ、育て方ひとつ。」

鈴木氏の教育哲学は、社会心理学者の Edward Deci の理論と共通する部分が多いと考えられる。

Deci は、無動機づけ、外発的動機づけ、内発的動機づけを、自律性の程度によって一元的に分類する自己決定理論を提唱した。その概要を図1に示す。鈴木氏の「叱って育てれば、叱られることを何も感じない能力が育ち、強情な心、親の言うことを聴かない子供に育つ」は取り入れ的動機づけを持つ子供の姿であると言える。一方、「遊びで始め、遊ぶ楽しさで導く」は、子供の内発的動機づけを育む指導であると言える。

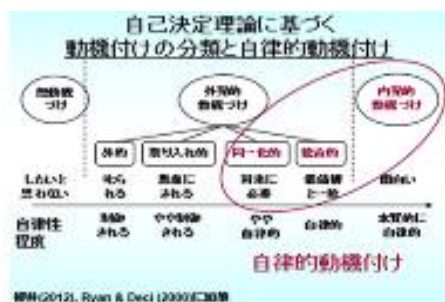


図1. Deci 氏の自己決定理論に基づく動機づけの分類と自律的動機づけ

## 6. 聞き取り調査

本研究では、筆者のバイオリン教育について筆者の母親に聞き取り調査を行った。本章では、その概要と特徴を述べる。

筆者の両親は筆者に音楽を好きになってほしかった。また、バイオリンも弾けるようになってほしい。それを何世代も文化として持続してほしいと願っていた。

筆者が2歳の頃、子供がバイオリンに興味を持つようにと子供の前で母がバイオリンを弾き、父がチェロを弾いて見せた。それを見た筆者は、単純に「自分のバイオリンがない。」といい、バイオリンへの興味を示した。

3歳の頃、バイオリン教室に1年間通ったが、そこでは統制的な教育を行っており、幼児期の筆者はバイオリンへの興味を失った。母はこのままでは、バイオリンへの嫌悪感が強

くなると感じ、当時のバイオリン教室を辞めた。

ある日、母がテレビで楽しそうに演奏されていた篠崎史紀氏を見て、「これほど楽しそうに演奏できたらどれほど良いだろうか。」と感じ、篠崎史紀氏とそのご両親が指導している篠崎バイオリンスクールへ通うことを決断した。

当時通っていた篠崎バイオリンスクールという教室は、バイオリン教育や才能教育で世界的に有名である鈴木鎮一氏の理念に強く影響を受けた教室であった。幼児のバイオリンスクールとしてまた、著名な演奏家を輩出するスクールとしても日本中に知られた教室であった。

篠崎バイオリンスクールの方針は幼児のバイオリン教育であり、子供のバイオリンがより上達するには、先生だけでなく、親の役割がとても大切であることが分かった。バイオリンは子供だけが習うのではなく親も習い、家庭で子供に親が直接教えなければならない。そのため、母親はバイオリン教本の一曲先の曲を習い、子供は母親より一曲前の曲を家庭で母親に教えられて練習した。

篠崎バイオリンスクールでは、そこに通っている親御さんは、皆音楽に携わる仕事をしている方がほとんどであった。

そんな中、母は一般の会社員であり、高校でビオラを部活で弾いていただけで、バイオリンを弾いていた経験は全くない。そんな状況でも母には夢・目標があった。

「子供にバイオリンをうまくならなくても、弾けるようになってほしい。そのバイオリン文化を孫やその先の世代に引き継がれてほしい。」という夢であった。

当時のバイオリンのレッスンは30分で、そのうち子供のレッスン時間は5分で、残りは親へのレッスンであった。子供は集中力がなく、長く集中することができたいためである。

当時、家庭でのレッスンは非常に厳しいものであった。例えば、練習を拒否すれば、家のプレーカーを落とされ、生活ができない状況にまで追い込んだ。また、他の子供のようにスポーツでの習い事に興味を抱いたが、手を傷つける恐れがあるため、習うこともできず、筆者の意思が抑圧されていた。そんな状況で練習していた筆者は、練習が負担になってきた。しかし、当時は母親の考えや状況まで把握することができず、揉めたりすることも頻繁にあった。

そのような状況の中、徐々に母親と筆者との間の成長曲線に差が生まれ始め、子供の筆者が一曲前の練習曲を早く終わ

り、母親が一つ先の曲を習得するまで、待たなければならぬという状況が続いた。

母親は仕事をしながら、家庭では、子供にバイオリンを教えるだけでなく、自分の練習のために自分の寝る時間を割いて、夜中に自宅内に設けた防音室で練習していた。母はバイオリン未経験者であり、大人からバイオリンを始めたので、そこから生じる上達の差が徐々に母のプレッシャーとなった。そのこともあり、筆者が小学5年生の時にバイオリンスクールを辞めた。

今回の母親への聞き取り調査で明らかになったことは、当時、練習拒否の際にブレーカーを切断した理由として、「子供にも嫌なことでも続けなければいけないということを理解してほしかった。」という考えを持っていたことである。これは、母親独自の考えであり、篠崎バイオリンスクールの理念ではなかった。

ここで、篠崎バイオリンスクールの先生と母親、母親と筆者との教育の特徴を、Ames によるクラス構造を用いて分析することを試みた。この手法は、教授方法を「課題」、「権威」、「評価/承認」に分類し、それらが動機づけパターンに与える影響を分析するものである。本研究では、この手法に「理念」の要素を加えた。Ames は「熟達目標（わかるようになりたい！という目標）」を達成するためには、課題・権威・評価のシステム化が重要であることを主張している。分析の結果、特に、先生と母親間の教育において、システム化が実施されていること、先生→母親→筆者という関係の中で、自律性支援連鎖が存在することが分かった。(図2)

ただし、当時は、最初に体験した統制的教育によりバイオリンに対する興味がほとんど失われていた。このため、内発的動機づけをほとんど感じず、むしろ取り入れ的動機づけの方が高まっていた。その中で母親の筆者に対する指導法は独自のものもあり、必ずしも篠崎バイオリンスクールの理念と合致するものではなかった。ただし、これは、「いずれは、バイオリンへの興味を取り戻し、取り入れ的動機づけを『卒業』して欲しい」との思いからの行動であったように考えられた。

	先生→母親	母親→子ども
理念	成長は親、先生、自分次第	複数世代でのバイオリン上達
課題	・教育理念を伝える ・教育可能か見極める	先生に指摘された箇所を繰り返し練習
権威	具体的指導方法には介入せず	母親の指の位置などを確認
評価	次の曲を指示	練習拒否の場合、家のブレーカーを落とす
動機づけ	子供が上達するよう多大な努力 (篠崎の教育理念と母親との価値観が一致したことによる統合的動機づけ)	・電気の無い生活を選けるため練習(取り入れ的動機づけ) ・練習による有能感獲得(内発的動機づけ)

図 2. 篠崎バイオリンスクールの教育内容に関する Ames のクラス構造の分析

## 7. 筆者の合気道経験談

本章では、筆者の合気道修業の概要と特徴を述べる。筆者は小学5年生の頃より合気道を始めた。きっかけは「拳児」松田隆智著の中国武術や日本武道に関して記された漫画であった。この漫画の著者である松田隆智氏は武道家でもあり、漫画の内容は松田氏の経験に則したストーリーになっている。そのため、現実に存在する武道の不思議さに非常に興味が湧いた。

特に合気道は相手の力に関係なく、自分の力を使わずに、相手の力を利用して、技を繰り出す武道であると描かれており、非常に興味を持った。

しかしながら、たとえ武道を習いたいと思っても、当時はバイオリンを習っていたため、武道の習い事は反対されていた。何故なら、武道は手や指を痛める可能性があるからである。

したがって、当然最初は母親から反対されていた。しかし、当時通っていた塾の先生が筆者のやりたいことができない状況を見かねて、母親に「何か一つでも子供がやりたいことをさせてみてはどうか。」と提案した。

母は当時バイオリン教室に負担を感じ始めていた。子供をプロに育てるわけではないし、もう十分にバイオリンを弾くことができていると考え、塾の先生のアプローチを受け入れた。こうして筆者は合気道を習い始めることができた。

筆者は合気道に対して非常に大きな好奇心や興味を抱いていたため、道場でも人一倍熱心に練習した。

道場の師範は一人一人の稽古量やモチベーションを見極め、熱心であれば、技のレベルを上げ、指導もよりレベルの

高いものへと変更していく指導法を行っていた。

したがって、筆者は早くから同年代の子供と組むのではなく、大人と一緒に練習を行っていた。

合気道に対する動機づけが高ければ高いほどレベルを上げた指導をするので、筆者は、既定の年齢に達するよりも前に、中学3年生の時点で5級の審査を受験させて頂いた。さらに、この頃には初段の技を身に付けていた。

そういった指導法のおかげで有能感も高まり、内発的動機づけも高まった。

中学2年生の頃に合気道家として合気道を職業にしようと考え始めた。そこで、師範に、合気道家になり、東京の（公財）合気会本部道場のもとで指導職員として働きたいと伝えた。

中学、高校と合気道を続け、高校2年生の冬に初段を認可された。大学に進学する際に、地元に残まるのではなく、思い切って、違う場所に行き、異なる合気道の技を体験したいと感じ、高知県立高知工科大学へと進学した。

合気道は同じ流派でも全国的に区分されており、区分ごとに決められた技や型が多少異なっている。そのため、異なる地域で異なる技を学べば、合気道家としての自分の価値があると感じたのである。

高知工科大学の合気道部へ入部し、正岡師範へ師事したが、そこでの合気道は別の流派と感じるほど全く違うものであった。最初は、恐らく合気会の技とは違う技を学ぶことで、その技が身に付き、本部道場での研修の際に支障になってしまうのではないかと考えた。

しかし、稽古を積むにつれて、合気道の本質は正岡師範の合気道ではないかと感じ、この経験がいつか自分の身になると考えた。

正岡師範に本部道場へ合気道の指導者になる旨を伝えたのは大学3年生の頃であった。

合気道本部道場へ指導者として申し込みをするには道場の師範からの紹介が必要であった。当時大学生の筆者は地元の道場には所属しておらず、高知の正岡師範の道場に所属していた。

そこで、正岡師範の紹介で本部へ奉職したいと申し出たが、師範からは「私の紹介より、全国合気道連盟の尾崎師範の紹介の方が良いだろう。」ということで、本部道場で重要

な役職についておられる尾崎師範を紹介して頂いた。

実は正岡師範と尾崎師範は深いつながりがあり、かねてより交流を深めていた経緯があった。

筆者は尾崎師範と密に連絡を取り、本部道場における合気道家のトップに位置する道主のもとへ挨拶に赴き、そこで2週間研修することになった。

2週間の研修は非常に過酷なものであり、一日の稽古で全身にあざが残っていた。2週間の住み込みの稽古で今までの熱意を込めて全力で稽古したが、合気道家になることはできなかった。それと同時に合気道への熱意も燃え尽きてしまったが、悔いは残っておらず、貴重な経験をさせてもらったと感じている。

現在は合気道の熱意・動機づけをほとんど失ったが、バイオリンへの内発的動機づけが高まっており、日々練習に励んでいる。

## 8. 考察

### 8.1 バイオリン教育の考察

本章では、筆者が経験したバイオリン教育と合気道修業の特徴を、自己決定理論と内発的動機付けの視点に基づいて比較分析する。既に述べたように、鈴木鎮一氏の考案した鈴木メソッドという教育は、内発的動機づけを促進させつつ幼児の能力育成を図る取り組みであった。

母が筆者に行った教育の中にも、鈴木メソッドに基づくものが含まれている。それらは以下の二点である。

① 環境で育てる

② 繰り返し練習する

①は幼児期の人格形成において、家庭環境を整備することである。鈴木メソッドのバイオリン教育であれば、「曲のレコードを毎日聴かせる」というものである。これは、幼児に音楽をやりたい、遊びたいという心理状態を促すことが目的である。筆者も同様に経験しており、毎日の就寝時に聞くことが習慣となっていた。

②は鈴木氏の理念の一つである「能力が能力を育てる」という考えに則している。練を継続して行うことによって発育された能力が年を重ねるごとに増強していき、増強差も大きくなっていくというものである。篠崎バイオリンスクールでのレッスン法は鈴木氏の理念に沿っており、家庭でのレッス

ンも同様であった。

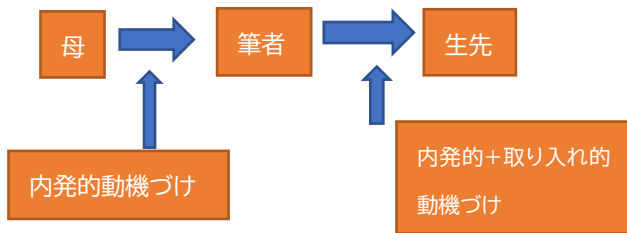


図3 「先生→母→筆者の動機付け分析」

母親は筆者にバイオリンを無理やり習わせたわけではない。筆者が自ら習いたいと言って始めたのである。にもかかわらず、筆者の動機付けの自律度、並びに、能力は充分には向上しなかった。このような状況において、母親は、筆者が練習を拒否した時は、家のブレーカーを切るなど、独自の教育を行った。その結果、筆者の中には、取入的動機付けが高まっていった(図3)。この主な理由は、筆者が幼少期に体験した統制教育にあると思われる。これをモデル分析した。

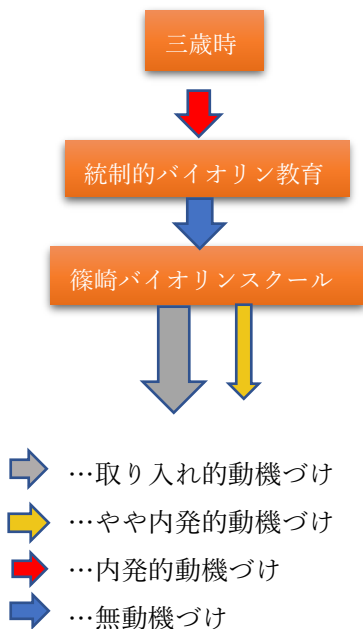


図4 「3歳時から篠崎バイオリンスクールに通っていた頃までの動機づけ分析」

## 8.2 合気道の修練の考察

文献調査によって明らかにしたように、鈴木氏のバイオリン訓練法は繰り返し練習による勘の育成を図るものであ

た。

これは武道においても同様であると感じた。特に合気道においても、定められた型の反復稽古によって技の精度やキレを向上させ、動きや技によって相手の体勢を崩す感覚を養う練習が重要となっている。

したがって、鈴木氏のバイオリン教育の理念と合気道の理念とが重なっていたことから、バイオリン教育において体験した若干の内発的動機づけが合気道に「移行」し、増大したのではないかと考えられる。

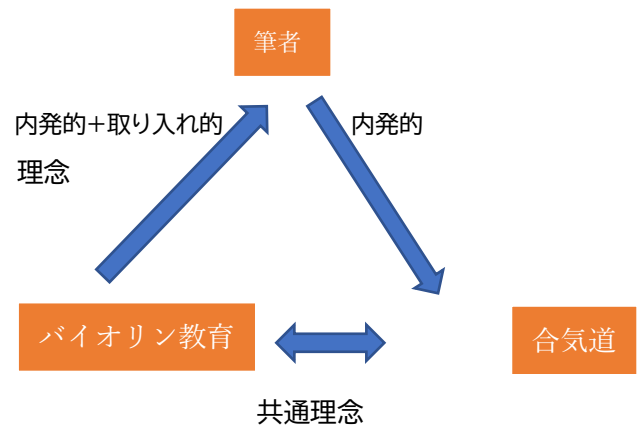


図5 「筆者と合気道、バイオリン教育の関係図」

さらに、合気道の指導者の道を選び、合気道を極めようと思った経緯を分析する。その際、どのように内発的動機づけが育まれていったかを、Deci氏の人間観の循環図を用いて分析することを試みる。

そこで、Deciの人間観の循環図を用いて分析したい。

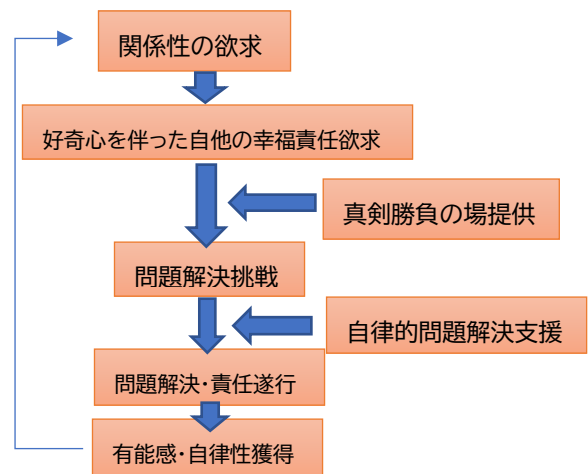


図6「渡邊法美教授によるDeci氏の人間観の循環図」



この図を用いて本研究では、合気道の昇段審査を例に挙げて分析していく。

まず、関係性の欲求であるが、昇段審査の場合であれば、周りに認められたいという欲求があった。幸福責任欲求では、より技の向上を目指したい。真剣勝負の場では、昇段審査に該当する技を反復して稽古し、その技をより向上させる。昇段審査を経て師範からのアドバイスや激励の言葉ももらい、昇段が（公財）合気会本部道場より認可され、更なる内発的動機づけを獲得する。

さらに、この分析において、どこが鈴木メソードの教育法と一致するかを考察した。

それが下図に赤丸で表記した箇所である。

表 1「審査における筆者の人間観の循環図」

関係性の欲求	合気道で周りから認められたい
幸福責任欲求	技の向上を図りたい
真剣勝負の場	昇段審査の反復練習
問題解決挑戦	昇段審査
自律的支援	師範からのアドバイス
問題解決	昇段の認可
有能感獲得	動機づけ向上

○・・・鈴木メソードの教育法との類似箇所

まず、昇段審査の反復練習という点は鈴木鎮一氏の繰り返し訓練をすることで能力が育成されるという考えと一致していた。さらに、自律性支援には師範からのアドバイスが該当していたが、筆者が所属していた道場では、稽古で叱ることがなく、アドバイスとして技を指導し、稽古の士気を下げないようにしていた。

稽古中叱らないというのは、文献調査で記したとおり鈴木メソードにおいても実践されており、共通していた。

次に、昇段審査という例ではなく、小学生から大学4年生までの合気道の動機づけの分析を試みた。この場合は、一般的な関係性の欲求から有能感・自律性を感じたのではないように思われた。むしろ、高度な合気道の技を体験し、知り得たことで好奇心を感じ、有能感を感じたことによって、合気道を職業として追及していくという関係性の欲求へと変化していったのではないかと考えられた。

表 2「合気道における筆者の循環表」

幸福責任欲求	高度な技を体験し好奇心が生まれる
真剣勝負の場	黒帯の人と組む
問題解決挑戦	高度な技を身に付けたい
自律的支援	師範からの実演を交えて指導・アドバイス
問題解決	審査において認可を得る
有能感獲得	自信を得る
関係性の欲求	合気道家を目指す

地元の道場での師範の指導法は、練習での熱意を見極め、やる気に応じてレベルを上げていたということである。これにより向上心を損なうことなく、絶え間なく挑戦することができる。

さらに師範の指導法は実演を交えていた。合気道の技は感覚でしかわからないこともあり、口だけでは伝わらないことも多い。したがって、師範は実演を交えて体験させ、筆者が納得するまで技の効き目を伝え、更なる好奇心・動機づけ向上を図った。そこが筆者の経験した篠崎バイオリンスクールと地元合気道道場の指導の違いである。

表 3 に示されてあるように指導法において実演を伴うと内発的動機づけを促進することが可能であると感じた。したがって、バイオリン教育による理想的な指導方法は実演と口頭を交えた指導法なのではないかと思われる。

表 3 「バイオリンスクールと合気道道場との比較表」

	バイオリンスクール	合気道道場
技の習得	当人の勘	当人の勘
技術の向上	反復練習	反復練習
指導方法	主に口頭	主に実演と口頭
筆者が感じた動機づけ	取り入れの動機づけ	内発的動機づけ

### 8.3 全体分析

筆者が感じた取り入れの動機づけは、母が統制的教育によって子供が音楽に対して抱いた嫌悪感を払拭するための母なりの指導法の結果なのではないかと考えられる。つまり、もしも筆者が幼児期に統制的教育に出会わなければ結果としての動機づけは変わっていたかもしれない。

そこで、筆者がこれまで経験した、バイオリンと合気道に関して全体的な分析を試みる。

図 7 で示したように、最初は内発的動機づけを感じていたが、統制的教育によりバイオリンに対する動機づけを失うこととなった。ここで母親は、統制的教育によって筆者が音楽に対して抱いた嫌悪感を払拭するため、すなわち、筆者のバイオリンへの動機づけを失ってほしくないという一心から、独自の指導を行った。その結果、取り入れの動機づけはあるが、やや動機づけを獲得した。その後、合気道に対して、強い内発的動機づけを感じ、合気道家を目指すまで打ち込んだ。残念ながら師範研修は不合格となったが、全力を尽くしたという達成感を獲得した。

現在は、幼少期に行った母の家庭環境の整備（防音室設置など）によって、再びバイオリンに挑戦したい気持ちを感じている。

統制的教育により、動機づけがリセットされ、再び内発的動機づけ獲得には時間を要した。もし、統制的教育がなければ、早くから内発的動機づけにより、より高いバイオリン技術を習得できた可能性もあったように思われる。また、バイオリン教育にとって、実演指導法の大切さは合気道によって

実感した。

これを踏まえて筆者が提言する理想のバイオリン教育・指導とは、早期教育で、内発的動機づけを高めるように実演主体の指導法であると考えられる。

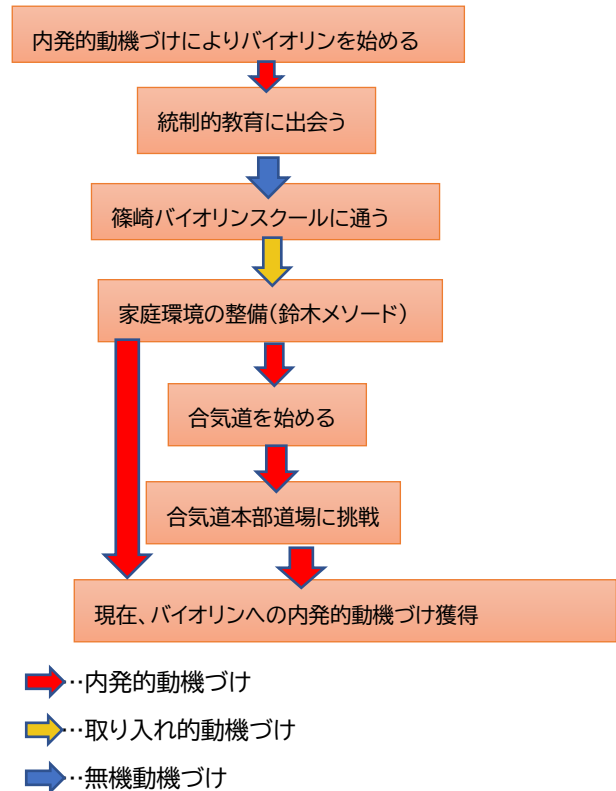


図 7 「3 歳時から現在までの筆者の動機づけ分析」

### 9. 今後の課題

鈴木鎮一氏の才能教育をより深め、才能の増強力を試算したい。

バイオリン教育と合気道の関係性をより深めて、バイオリン教育によって著者が受けた心理的作用が合気道にどのように向けられたかをより深く解明していきたい。

また、合気道の指導法として、内発的動機づけを高める指導法で実績を上げた道場が他にあるのか、もしくは合気道以外の武道・スポーツでも同様に成功例があるのかを、今後も調査したい。

### 10. 謝辞

本研究の論文作成にあたり、終始熱心なご指導を頂いた高知工科大学経済・マネジメント学群渡邊法美教授に心から感謝の意を表します。また、活発な議論・

助言をしてくださった研究室の皆様に心から感謝と御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

## 11. 参考文献

- ・「愛に生きる ―才能は生まれつきではない」 鈴木鎮一著 講談社現代新書、1966年
- ・「幼児の才能教育」 鈴木鎮一著 明治図書、1969年
- ・「才能開発は0歳から」 鈴木鎮一著 株式会社主婦の友社、2013年
- ・「音楽の車 ―鈴木鎮一の生涯と才能教育運動によせて」 本多正明著 株式会社全音楽譜出版社、2004年
- ・「奏法の哲学」 株式会社全音楽譜出版社、1999年
- ・「歩いてきた道」 鈴木鎮一著 音楽之友社、1950年
- ・「モチベーションをまなぶ12の理論」 鹿毛雅治著 金剛出版、2012年
- ・「人を伸ばす力」 エドワード・L・デシ+リチャード・フラスト著 桜井茂男監訳 新曜社、1999年